

カラスとネズミ—ヒトと動物の知恵比べ
 林良 博・武内和彦編 現代日本生物誌 (1)

川内 博・遠藤秀紀 著

岩波書店 2000年, 164ページ, 1,900円 (本体価格)

まずはタイトルである「カラスとネズミ」とは、何だろうかと思ったのが、この書評を書く羽目になった。実際、本を手にしてみると『現代日本生物誌』[全12巻]の第1巻である。巻頭の『『現代日本生物誌』がめざすもの』で対比することによって、現代を生き抜こうとしている生物のより本質的な特徴が明らかになると考えていることが分かる。生き物たちと人間社会との新たな関係に基づく新たな自然観の育成をめざしている。さすがに、コンセプトはしっかりしている。何故、カラスとネズミなのであろうか？ この対比の意味は最後まで読めば答えが出るであろう。個別に「なぜカラスなのか」「なぜネズミなのか」は目次の次にあり、両方とも人間社会に密接していることはあきらかである。それにしても「生物誌」とはなつかしいひびきである。

さて、この「生物誌」はどのように書かれているか。第1部カラス、第2部ネズミ、第3部討論という構成になっており、1部と2部はさらに、それぞれ5節と4節に別れている。

第1部カラスの最初の2節はカラス問題に取り組む経緯である。関係の複雑さを承知しながら30年来無策だった問題に果敢に取り組まれたことに敬服する。3、4節はカラスの知恵や分布などの話である。ハシボソガラスとハシボソガラスの世界分布をみるとハシボソガラスの分布のほうがはるかに狭く、ほとんどアジアに限られている。前半述べられている世界の各都市でカラス天国がアジアに多いのはやはりハシボソガラスのためだろうか。しかし、東京ほど人慣れているところはないようである。カラスの増加のグラフは驚くべきである。80年代から急増している。カラスの問題が5節で述べられているようにゴミ問題と直結しているとすると、80年代から著しいモラルの低下が起り続けていることになる。5節はゴミ問題で、東京都の生ゴミの量がものすごいと数値で実感できる。カラスの年間エサ量の388倍というからちょっとやそっとの努力ではカラスの数は減りそうにない。しかし、地域によって努力の成果も見られている。長い戦いになるだろう。カバーの折り返しに書かれているように「人と動物の現在の関係の仕方とともに、人間という生物の生きざままでが透けて見えてくる。」というが、最終節では、都会人の生態が書かれている。誰かがゴミを片付けてくれると人が思っている限りゴミは散らかる。ゴミの写真を見ても大きくゴミが散らかっているものをカラスがさらに細かく散らかしているようにも見える。「とうきょうのカラスをどうすべきか」というシンポジウムへの関心の高さが最初に強調されている。関心は高いが、人間がだらしのないのでは、「権兵衛が種まきゃカラスがほじくる。」ならぬ「都会人がゴミ出しゃカラスが…」という状態は変わらないかも知れない。シンポジウムの方向性として「どうにかすべきだ。」というのわかるが、どうするつもりかについてもう少し書いてほしかった。今後のカラスの問題の方向性をまとめられたという柴田敏隆氏のまとめられた方向性の記述がないのはシンポジウムに出ていない者にとって知りたいところである。

第2部ネズミではなぜ1100種もいうネズミ科のなかからドブネズミ、クマネズミ、ハツカネズミの3種のみがイエネズミになりえたのか決め手ははっきりしないことが述べられている。実験動物として生理学的にも非常によく調べられているネズミではあるが、脂肪蓄積能力との関係が示唆されてはいても、確実とはいえないうである。やはりネズミ学も奥が深い。本当にネズミ算式に増えていき、また、殺鼠剤の効かない集団が現れるとは恐れ入った。ドブネズミとクマネズミの2種のすみ分けは形態的にもはっきりしているところがカラスとは少し違うようだ。ネズミとの歴史は古くもっと深刻(ペスト、コンピューターの配線の切断など)かもしれないが、著者もいっているように、「イエネズミ対策は地味な段階になっている。」ようである。それだけ過去に真剣に取り組んできたということであろうか。「ネズミはテロリストだから、やっつける。」とか社会や技術は複雑になったが、人間の考えることは単純である。

第3部討論で、その点、著者も「道徳なしで、やっつけてしまえでよいから、ネズミについて書くのは気楽であった。」と述べている。第3部討論は編集者をまじえた4人の座談会でそれぞれの話題は面白いが、結局のところは良く読みとれない。それだけ問題は多岐にわたり、複雑だということであろう。ところで、川内さんは、動物が都市にもどってくるようになった理由を人間側の行動だけで説明されていますが、動物の人慣れの問題など

もあるので、人間から動物、動物から人間と双方公的に考える必要があると思います。林さんのいう「相手が変わったら、こちらも変わるというようなあいまいなものをどう研究するのが議論される。」べきかもしれない。最終目的となる「やや普遍的で現代的な動物の理解」に到達するためには、川内さんが最後、「対談を終えて」で述べられているように社会科学などの異分野と接触し、新しい見方の開拓が必要であろう。カラスとネズミのエサや生活環境を選ばない共通点やカラスとネズミに対する人の見方の違い、都市環境と人工環境といった利用環境のちがいなど対比しているが、少しずつでも努力することの大切さを感じる。人間がどう変わってきたか、動物がどう変わってきたか、いろいろ考えさせられる。一見、保全と対極にある問題のようであるが、もっと身近なこと、いや足元から考え直すためにも保全を志す人や、もちろん人と動物の関係に関心のある人に薦める。昔、見たヒッチコックの映画「鳥」のようなことにならないよう願うばかりである。

小藤 弘美（九大・生物資源環境科学・家畜繁殖生理）